

資料のより効率的・迅速な入手のために

鈴木 敬二

現在は従来の紙媒体の資料に替わる電子ジャーナルやインターネット上の情報など新しいメディアの実用化が始まった段階である。21世紀においても紙媒体の資料が無くなるとは考えられないが、これら新しいメディアの相対的な比率は増大し、また続々と新種の情報元が出現するものと考えられる。

こうした状況にあって、図書館は利用者が求める資料を迅速かつ効率的に入手できるよう努力していかなければならない。もちろん、前提としてできる限りの資料を京都大学の資料として確保することがなにもにおいてもまず重要である。限りある予算で効率的に資料を収集するためには、重複購入を避けることがまず考えられるが、そのためには、全ての資料を全学の共用資料として、京都大学の全構成員が簡便に利用できるよう条件整備が必要であろう。

さて、京都大学の資料にせよ、国内外の他大学・機関の資料にせよ、必要とする資料を所蔵している図書館を知ることが、資料入手のまず第一歩である。幸い日本においては学術情報センターの目録所在情報データベースが存在しているので、全国の大学図書館の所蔵を研究室や自宅からも簡単に知ることが可能である。ただし、現在のところ、入力されているのは全所蔵の1割程度にすぎない。遡及入力の早期完了が強く望まれる。次に入手については、直接図書館に出向くことなく予約や現物貸借あるいは文献複写の依頼がOPACから直接できるようにしなければならない。さらに、図書資料現物や複写物を研究室や自宅へ直接届けるようなシステムが必要であろう。

ただし、現在もこの相互協力の業務の利用は多く大変な作業となっている。今後は、全国的には文献複写センター機能付きの保存図書館の創設や複写業務の外部委託化などが検討される必要があるだろう。さらに、現在このサービスは有料であるが、料金徴収が大きな仕事となってい

る。今後、無料化も含めて、より簡便な方法を検討する必要があるだろう。

電子ジャーナルやオンラインデータベースでは、論文単位で検索が可能であり、抄録を参照し、必要とあればオンラインで全文を見たり印刷したりすることが可能である。今後はますます紙媒体から移行していくだろう。

現在のところ、これらメディアは高価な価格が問題となっている。特に、移行段階であり、冊子体と電子メディアの双方を購入しなければならないケースも多く問題が大きくなっている。コンソーシアム形成による価格交渉など、今後、利用が増加していくにつれ適正な価格になるよう図書館界全体で様々な努力が必要であろう。

WorldWideWeb上の情報も学術的に無視できない状況になってきている。玉石混淆のこれらの情報から学術的に有用な情報を選択・整理して利用者に提供することが図書館の重要なサービスになるものと考えられる。また、今後、さらにインターネットを利用した新しい形態の学術情報提供の仕組が出現すると考えられる。図書館員は常にこれらの情勢について監視する必要があるだろう。

現在の京大電子図書館システムは情報発信機能に重点を置き、貴重書の画像データベースは他を圧倒して充実している。今後は、以上に述べたような情報の配信機能にもさらに力をそそぐ必要があるであろう。

その際、大量の情報の中から利用者の必要な情報を容易に選択できるシステムあるいは情報源毎に異なるユーザインターフェースをいちいち修得しなくても済むような多種多様な情報元に対して、統一的なユーザインターフェースを提供するゲートウェイ機能などを提供する必要があるだろう。

(すずき けいじ：附属図書館情報サービス課

相互利用掛長)